

2021年度（後期）海外渡航旅費助成金成果報告書

東京大学地震研究所 修士課程2年

前田拓也

日本地震学会より海外渡航旅費を助成していただき、2021年12月12日から17日にかけて米国・New Orleansにおいて開催されたAGU Fall Meeting 2021に参加いたしましたので、その成果についてご報告いたします。

AGU Fall Meetingとは毎年12月に米国で行われる地球物理学全体の大会です。新型コロナウイルスの影響により今年度はハイブリッド形式で開催され、オンラインからは12000人、オンサイトでは10000人を超える参加者が集まりました。修士課程の2年間を新型コロナウイルスの影響下で過ごした私にとって、本学会は初めてのオンサイト参加学会であり、大きな期待と若干の不安を胸に渡航しました。最初に、新型コロナウイルスの状況が読めず、日本からの参加者がほとんどいない中、今回の渡航をサポートしていただいた皆様に心から感謝申し上げます。

今回私は「Comprehensive detection of tremor migration modes beneath Kii Peninsula, southwest Japan」というタイトルで口頭発表を行いました。これはスロー地震の一つである微動の移動現象に注目したものです。微動の移動現象はスロースリップイベントのプロキシと考えることができ、測地学的には捉えることのできない滑りを捉えることができると考えられます。この微動移動現象について紀伊半島において網羅的な解析を行なった結果、微動の移動現象は進行方向に対して直交方向に幅を

持つことが確認され、また短時間での移動に注目すると、進行方向は特定の方向に偏るのではなく等方的であることが確認された、という内容です。初めての英語でのオンサイト口頭発表でしたので緊張しましたが、発表後、席に戻る際に、聴衆の皆さんからの拍手があっただけでなく、現地で知り合った方々からジェスチャーで褒めていただいたり、すごくよかったよと声をかけていただいたりして、これがオンサイトの学会なのかと大きな驚きと喜びを感じました。またセッション中の質疑応答時間では拾いきれない質問もあり、セッション終了後に研究者の方が話しかけてくださり、議論することもできました。このような議論の中で大変面白い研究だと言っていただきとても嬉しかったです。

発表以外では、積極的に海外からの参加者、研究者、学生と話しかけるよう心がけました。特に所属機関の出展ブースでは様々な人に来ていただいたとともに、世界の震源分布や火山分布、鯨絵などに強い興味を示していただき、地震学は世界の多くの人にとって関心の強い学問であることを改めて実感しました。また、AGU2 日目の夕方には、Seismology and Tectonophysics Reception and Networking Event というイベントに参加し、多くの人と交流することができました。1日目に知り合った研究者の方とお話をするだけでなく、そこからさまざまな人を紹介していただき、コミュニケーションや交流の場としてのオンサイト学会の重要性を改めて感じました。さらに、地震学会の補助対象外にはなりますが、AGU 終了後には日程を追加してロサンゼルス

に立ち寄り、USC の Houston 教授と議論する時間をいただき、自身の研究の新たなアイデアや確かな手応えを得ることができました。

最後になりましたが、改めまして、日本地震学会による海外渡航旅費助成により、AGU 参加・研究発表という大変貴重な経験を積むことができました。このような機会を与えてくださった日本地震学会の皆様と関係者の皆様に心からお礼申し上げます。ありがとうございました。



ニューオーリンズ国際空港での AGU 歓迎のジャズセッション。



会場となった The Ernest N. Morial Convention Center の外観。